

「とと姉ちゃん」
でも話題!

花森安治の

青春ををみつめて

馬場マコトさんインタビュー

連続テレビ小説「とと姉ちゃん」で注目される、雑誌「暮しの手帖」の名物編集長・花森安治。その知られざる素顔に迫った『花森安治の青春』（潮文庫）が大きな感動を呼んでいる。平和を考える夏に読みたい1冊、著者の馬場マコトさんに聞いた。



【花森安治の青春】
馬場マコト著／潮出版社
680円＋税

撮影＝富本真之
取材・文＝増沢京子
イラスト＝松榮舞子

「とと姉ちゃん」のヒロイン・小橋常子（高畑充希）は天才編集者・花山伊佐次（唐沢寿明）との運命的な出会いを機に、戦後、女性誌創刊に動き出す。この花山のモデルとなったのが、「暮しの手帖」の編集長・花森安治だ。衣食住にかかわる独創的な「生活の知恵」、読者の絶大な支持を集め企業をも動かした「商品テスト」などの斬新な企画から、デザインや表紙のイラストまでいっさいを担った類まれな視点とセンスの持ち主だった。その生涯を丹念に取材し、『花森安

治の青春」として綴ったのが、自らも長年にわたりクリエイティブ・ディレクターとして広告業界で活躍しつづけてきた馬場マコトさんだ。「私は小学校3年生以来『暮しの手帖』の読者で、彼の徹底した美意識とデザイン力はどこで培われたのか、また著書『一棧五厘の旗』で見た反戦、反権力のエネルギーはどこからくるのか、ずっと知りたいと思っていました」

1978年、花森が66歳で亡くなったとき、戦時中に彼が大政翼賛会の宣伝部員として、足らぬ足らぬは工夫が足らぬや、欲しがりません勝つまで、などの戦意高揚広告に携わっていたことを知り、衝撃を受けたという。なぜ花森は宣伝戦に手を染めたのか。同じ広告企画者として戦争が起きたら自分も同じ道を歩くのか。馬場さんは花森の青春時代について調べ始めた。

「暮しの手帖社には、いまでも彼が戦時中から亡くなるまで何度もペンキを塗り替えて使いつづけた、翼賛会時代の大きな机が残っています。この机から、二度と戦争を起こさないための雑誌を世に送り出すことが、戦争責任の取り方であり、花森が自らに課した『償い』だったのかもしれない」

母に誓った青春の日

「花森は、戦後のジャーナリズムのなかで反権力・反社会の闘士のように見られています。じつは生涯一貫してフェミニズムがベースの人でした」

1911年神戸に生まれ、ハイカラ好きで根っから遊び人の父と、働き詰めで苦労ばかりの母のもとで育つ。彼の人生を決定づけたのは、18歳のときに出合った1冊の本だった。浪人時



代、神戸の図書館で偶然手に取った平塚らいてうの『円窓より』。「元始、女性は実に太陽であった。今、女性は月である」の一文に触れ、それまで味わったことのない感覚を覚えた。



女性が太陽の暮し。 女性が真ん中にある暮し。 それが続けば戦争は 二度と起こらないはずなんだ

「それにしても、なぜ18歳の青年が女性論を手にしたのか？ 母親がつねに放蕩家の父に苦勞させられていて、太陽ではなく月の存在。だったからか。いや、そうではなく、読み進むなかでらいてうの言葉と母親がリンクした偶然の産物だったと思います。それが彼の心の中にフェミニズムの概念を育み、『暮しの手帖』を生む原点になったのでしよう」

懸命に働く母の姿を思いながら、お腹を減らした花森は、図書館の食堂で15銭の松葉どんぶりを食べる。目の前でかまぼこを刻む食堂のおばさんを見つめ「この人はどんな暮しをしているのだろう」と想像をめぐらせた。地道に生きる一人の女性の「暮し」に思いを馳せる感性とまなざしが、すでに芽生えていたのかもしれない。

発禁本となっていたこの1冊の本との「運命の出会い」をきっかけに、母、そして女性の生き方について思索するようになった。図書館にあった婦人問題の本をすべて読みつくし、当時活躍していた女性解放運動家3人、平塚ら

いてう、与謝野晶子、伊藤野枝らの生き方に関心を寄せた。しかし、旧制高校1年生の夏休み、38歳の若さで母がこの世を去る。途方にくれるなか、将来は新聞記者か編集者になる、と生前の床に臥した母に誓ったことが支えになった。

その言葉通り、高校・大学時代から編集の才能を発揮。卒業後は広告デザインの仕事をするが、「一銭五厘」のはがきで召集令状が届き、満州へと送られる。人間が人間でなくなる凄惨な戦場だった。結核を患い傷痍軍人となって帰国した後、かつての知り合いから声をかけられ、大政翼賛会宣伝部に携わる。やがて戦争は終わり、花森の心に深い爪痕が残った。いったい自分は何をしていたのだろうか。強い自責の念に襲われた。

そんなとき、日本読書新聞の大橋鎮子（「とと姉ちゃん」ヒロインのモデル）と出会った。「戦争が奪い取ってきた女性たちの想いに応えられる雑誌

を作りたい」とまっすぐに語る鎮子の言葉に心を動かされ、2人は後に「暮しの手帖」を創刊する。

女性の歩幅を体感して

「花森は『暮しの手帖』創刊号をもって、念願だった平塚らいてうのもとを訪ねて随筆を依頼し、2号目から特集を組みます。そこに書かれた『胡麻じるこ』の作り方を知りたいとの声が読者から寄せられると、4号目に掲載。それを食べたとき、20年前に神戸の図書館で味わった、あの松葉どんぶりに通じる温もりを感じるんですね」

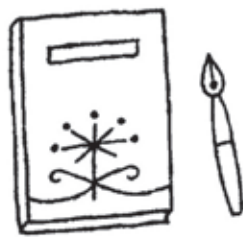
これからは、地に足のついた揺るぎない暮しを作っていくのだ、と決心した。戦後、女性たちが渴望していたのがファッションだが、町は焼け野原でモノが何もない時代。それなら、自分で作るうぐと提案し、家にある端切れや浴衣でアクセサリーや洋服、下着まで作る。会社に台所・洗濯室・裁縫室などを備え、編集部員が実際に作って

記事にしていた。ときに花森は、女性の生活感覚・皮膚感覚を知ろうと、自らスカートをはいて街に出た。

「奇異な視線にさらされながらも、女性を感じていることは何か、わずかな歩幅の違いや動きやすさなど、自ら体感することをなによりも大切にしました。世間の注目を集めた商品テストにしても、たとえばソックスは何回洗ったらすりきれるのか、実際に使っている消費者の側に立った誠実な製品づくりを企業に求める。つねに身近な暮らしに立脚した人でした」

とと姉ちゃんとフライパン

この本の中に印象的なシーンがある。「女性が太陽の暮し、女性が真ん中にある暮し、それが続けば戦争は二度と起こらないはずなんだ」と肝に銘じた花森が、空襲をくぐり抜け「お金持ちになって母を幸せにしたい」という大橋鎮子と語り合うシーンだ。





profile

ばば・まこと 1947年、石川県生まれ。早稲田大学卒業後、日本リクルートセンター入社。マッキンゼーエリクソン博報堂、東急エージェンシー制作局長を経て、99年より広告企画会社「馬場コラボレーション」を主宰。国内外の広告賞を多数受賞。『ビッグ・アップル・ラン』（講談社）で第6回潮ノンフィクション賞優秀作に輝く。著書は『戦争と広告』『銀座広告社第一制作室』など多数。



夕焼けに染まるお茶の水の高台の上で、「何が見える？」と語りかけながら、闇市の店頭で積まれ、夕日に輝くフライパンを見て、「守るのはこのフライパンなんだよ」と花森が言う。

「この出来事は、花森も大橋も『暮しの手帖』のエッセイで唯一2人が共通して書いた特別なシーンです。これが起業のきっかけでもあり、編集方針がそこで固まった非常に重要な場面だったことがわかります」

編集に関しては天才的だが経営面は無頓着だった花森を支えたのが、戦前は銀行に勤め、戦後の女性起業家の草分けともいえるべき大橋だった。2人は、二度と戦争をしない世の中にしていくための雑誌を作ろうと誓う。

「過去の戦争で、死を賭してまで国家に抗った人びともいます。それは素晴らしいことですが、実際にできる人は少ない。いざ戦争が起きれば、多くの人はいつのまにか巻き込まれていってしまう。あの強靱な精神の花森ですら。だからこそ、戦争を起こしてはいけないのです。それをいま踏ん張って堂々と伝えるのは女性だと思えます。だから女性たちに、ぜひこの本を読んでほしい。『花森安治の青春』を通して、女性たちがもう一度、戦争と暮らしについて考え、本当に大切なものは何か、自分の暮らしをみつめるきっかけになれば、なによりうれしいですね」